

球磨川水系学識者懇談会 委員のみなさまへ

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 共同代表 岐部明廣
緒方俊一郎
7・4 球磨川流域豪雨被災者・賛同者の会 共同代表 鳥飼香代子
市花 保
美しい球磨川を守る市民の会 代表 出水 晃
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康
代表連絡先 熊本県人吉市南泉田町1 岐部明廣

2020年7月4日球磨川豪雨災害の検証について

2008年の蒲島知事による川辺川ダム中止表明以降、ダムによらない治水を検討する国、県と流域市町村長だけの協議が12年間続きましたが、実効的な治水対策案が示されたことはありませんでした。特に最も効果的な、球磨川の河床に堆積した土砂の撤去については対策から外されるなど、住民の感覚からかけ離れた検討がなされてきました。そのような状況の中で、今回の豪雨災害が球磨川流域を襲いました。

住民は現在、復旧のための道を模索している状態ですが、復旧復興のためには、なぜ豪雨災害が発生したのかという事実の解明がまずなされるべきです。その中でも特に、なぜ流域で50名もの命が失われたのか。何が生死を分けたのかという分析と解明を最初にやるべきです。しかし、国や県はそれらの原因の解明をすることもなく、流水型ダム建設を推し進めようとしています。

本年7月から国交省が見直しを進めている、新たな球磨川の河川整備基本方針の想定降雨量の確率計算から、昨年7月4日の豪雨が対象から意図的に外されています。つまり、新たな基本方針でも、昨年7月4日の豪雨は「想定外」となってしまいます。

私たちは、被災直後から今回の豪雨に関して以下のような検証をしてきました。

1. 流域の森林の状況

球磨川流域の大半は山林です。戦後の拡大造林により、球磨川流域の多くの山林で自然林が伐採され、杉、ヒノキの植林が進められました。その結果、昭和40年前後には多くの洪水が発生しました。その後、植林の成長が進み、しばらくの間大きな洪水は発生しませんでした。しかし近年、多くの山で重機を用いた大規模な皆伐が行われ、球磨川流域はいたるところ土留めも植林もなされていない「はげ山」の状態になっています。それを空前の豪雨が襲いました。豪雨は保水できなくなった皆伐地の土砂を削り、土石流を生み出し支流を土砂で埋め、一挙に球磨川本川へと、多くの流木を伴う土石流を流し込みました。

2. 国が「想定外」とする降雨だった

今回の豪雨災害では、国の80年に一度の計画降雨量よりはるかに多い雨量、つまり国が「想定外」とする降雨でした。ダムと連続堤防による国の河川整備基本方針は、今回の豪雨の様な国が想定する以上の降雨では役に立たないことが明らかになりました。

球磨川本川上流部や川辺川上流部の雨量は、中流部と比べると少ないものでした。それは西から来る線状降水帯の積乱雲が、球磨村などの中流部の山で多くの雨となったからです。今回の洪水は、人吉市から球磨村、芦北町、坂本町で被害が顕著であり、洪水後に流水型ダムの建設が検討されている川辺川流域の雨量も被害も相対的に小さいのが特徴です。川辺川に流水型ダムを造っても、効果は小さいものと考えられます。

3. 人吉市で20名の方がどのようにして命を落とされたのか

人吉市では20名の方が亡くなっています。私たちはこの豪雨災害を検証するために165名から浸水時間と浸

水深、洪水が流れた方向等の証言や、2000枚以上の写真や映像の入手し、また240名の避難行動の証言を集め、資料として整理し分析しました。本来なら洪水被災者の声を聞き、原因を探るのは国や県の行政が行うべき業務であり、原因の究明なくしては次の洪水への対処を的確に行えないはずなのですが、現時点で行政は、なぜ人が亡くなったのか、どうして命を落とされたのかの検証をしていません。

人吉市では、7月4日早朝から球磨川の支流、山田川、万江川からの氾濫が始まり、その支流からの氾濫水が20名の命を奪いました。山田川では、午前6時30分頃から氾濫が始まっています。多くの証言によると、人吉市九日町付近の球磨川本川は午前8時頃から堤防からの越流を開始しています。国は球磨川のバックウォーターにより支流が氾濫したと主張しますが、支流は球磨川本川よりも90分ほど早く氾濫しているのです。支流の氾濫は急激な流れを伴って市街地に入り込み、道路や市街地を縦横に走る用水路である御溝を伝わり、市街地一帯をほぼ水没させました。川辺川ダムが効果を発揮はじめる午前8時頃までの間には、支流の氾濫により人吉市の20名の犠牲者の大半は亡くなられていました。

亡くなられた方の年代は80歳代が8名と最も多く、平均年齢では74.1歳です。また屋内と避難途中で亡くなられた割合はともに50%で、屋内から逃げる余裕がないほどの出水に遭遇したことや、屋外での急激な増水により命を落とされた事が推測されます。

今回の洪水でなぜ命が失われたのか、20名のうちの2名の事例を紹介します。目撃証言によると、Aさんは午前7時37分頃、人吉橋を通過しようとして人吉駅方面からバイクで走ってこられたそうです。勤務地に向かう途中の事故だということがのちに判明しました。この交差点で山田川から氾濫してきた濁流に遭遇し、バイクと共に流されたそうです。この時点で球磨川の本流はまだ氾濫していません。

下薩摩瀬町のIさんは、山田川と御溝の氾濫により、家から避難途中で家の前の道で被災されました。時刻は8時頃です。Iさんの家の裏手に御溝が流れており、さらに家の前の道には深さ1mほどの比較的狭い水路があります。近隣の人々の証言によると、Iさんは家の裏手から水が迫ってきたのを知り、夫婦で家の前に出られたそうです。その時刻、家の前の水深は50cm程度で、道を横断することは可能な流れだったそうですが、家の前の水路に落ちた奥さんを助けようとして水路に入り、奥さんを助け出した後に御溝に流され命を落とされました。

4. 被害を拡大させた第4橋梁(くま川鉄道)

今回の豪雨では、球磨川、川辺川の合流点直下にある第4橋梁(くま川鉄道)が流木や木材によりダム化し、橋梁に引っ掛かった大量の流木と滞水した濁流が第4橋梁を破壊し、第4橋梁上流に溜まっていた大量の水が津波のように人吉市街地の上端部(上・下新町)へ一挙に流入し、被害を拡大させました。ところが行政は、第4橋梁が豪雨災害にどのような影響を与えたのか、一切検証をしていません。

5. 緊急放流目だった市房ダム

「市房ダムが午前8時30分に緊急放流を開始するので、命を守る行動を取るように」との通知を、人吉市の多くの方が聞いています。避難した屋根の上で聞いた多くの市民が絶望を感じたと証言しています。国や県のダム管理者は、「緊急放流というものは、入ってきた水をそのまま流すだけである。それまでは減水の効果を出している」等の宣伝をしていますが、緊急放流の事態とは洪水調節が不能となり、対処ができなくなるという、いわばお手上げの状態になるということです。ダムが洪水をため込んでいた分、放流量が一気に上昇するのは明らかです。市房ダムが過去3度洪水調節不能になったことや、ダム治水には限界があること、緊急放流の危険性があることを熊本県も認めています。

また、市房ダムの湖底に溜まった膨大なヘドロは、流木を伴い堤防を越え、市街地へと一気に流れ込みました。ヘドロは洪水後も悪臭を放ち続け、復旧の大きな障害になりました。

6. 被害を拡大させた連続堤防

今回の豪雨は、堤防を2mほど越える洪水でした。堤防や樋門は市街地の水位を一気に上昇させ、住民の避難を困難にさせました。球磨川の水位が下がっても連続堤防のために水が抜けきらず浸水したままの状態が続き、いつまでも市街地に泥流が溜まり続け、救助活動を難しくさせました。

7. 必要なのは球磨川の河床に堆積した土砂の撤去

人吉市街地の球磨川の河床に堆積した土砂の撤去が長年行われておらず、住民は土砂撤去の要望を何度も出しましたが、国は昨年7月の豪雨災害まで住民の要望に沿って土砂の撤去をしたことはありませんでした。その結果、年々土砂は溜まり続けて洪水が起きやすい状況になっていたのです。このことが、市街地の洪水氾濫をさらに助長しました。

洪水後の堆積土砂の掘削の様子を見ると、河道の断面の逆台形を大きくするだけの工事が多く見られます。確かに河道の断面積は大きくなり、その地点での流下能力は増やせるでしょうが、これでは下流にますます洪水が集中します。河道掘削について実施前に地域の住民に説明するとともに、地域住民の意見をよく聞くべきです。

8. 流水型ダムでは命も清流も守れない

毎日新聞（2021年5月3日付）によると、流域治水協議会の説明資料から「川辺川にダムを建設後、今回の1.3倍以上の雨量があった場合は異常洪水時防災操作（緊急放流）に移行する」との資料が削除され、国交省は関係文書を破棄していました。流水型ダムも満水になれば緊急放流を行うことは明らかです。仮に川辺川ダムが存在し、今回の豪雨で球磨川中流部を襲った線状降水帯が上流部を襲った場合、市房ダムも川辺川ダムも満水となり、同時に緊急放流をしていたことは明らかです。

流水型ダムの最大の弱点は、穴（放流孔）がダムの下部にあるために、洪水時に流れる大量の流木や土砂、岩石などがダムの穴に押し寄せ、穴がふさがる点です。国内の流水型ダムはいずれも、流木や岩石が穴に入り込まないように、穴の上流側は20cmのすき間のスクリーン（柵）でおおわれています。洪水時にスクリーンにはりついた流木等が穴をふさぐのは明らかです。国交省は「洪水時、流水型ダムの穴をふさぐ流木は、ダムの水位が上がると浮くから、ダムの穴はふさがらない」としていますが、あり得ないことです。ダムの穴がふさがれば、洪水調節できなくなるのはもちろん、ダム周辺や下流は大変危険なことになります。

流水型ダムは洪水時、ダムの上流に土砂や岩石等を大量にため込み、洪水が終わった後は、たまった土砂が露出するので流れ出し、川の濁りが長期化します。また、ダム下流への砂礫の供給はなくなり、岩盤の露出など河川環境に大きなダメージを与えることは明らかです。

球磨川豪雨検証委員会で国交省は、7月4日豪雨で仮に川辺川ダムがあった場合、「川辺川ダム地点での流量（毎秒3000トン）のうち毎秒2800トンを洪水調整するので、人吉の浸水面積を6割減らした」としています。しかし、7月4日豪雨での川辺川上流域の降雨は相対的に少なく、川辺川ダム地点で実際に毎秒3000トンも流れていたとは考えられません。今回の豪雨では、球磨川の多くの橋梁が洪水に飲み込まれ、流失しました。しかし、川辺川ダム建設予定地のすぐ上流と下流にある、古くて小さな2つの吊り橋が流されずに残っています。このことは、川辺川ダム地点で毎秒3000トンも流れていなかった動かぬ証拠です。

9. おわりに

災害は、人間による利害がらみの野放図な開発が引き起こしています。球磨川には何の責任もありません。コンクリートづけで川を破壊するダム治水を私たち住民は一切望んでいません。流域住民は、自然の営みが豊かな球磨川を守ることが、この地に生きることだという認識があります。またこの川を未来に手渡すという重要な役目があります。洪水にどのように対処し、球磨川の清流と共にどのように生きていくかという命題は、国土交通省など行政機関だけでは解決できるものではありません。住民参加の川づくりを強く求めます。

また皆様方が、国土交通省の一方向的な見解ばかりではなく、住民側の意見も聴取されることを何卒お願い致します。

以上

連絡先	清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会
共同代表	岐部明廣 人吉市南泉田町1
事務局長	木本雅己 人吉市九日町93-2 電話 090-1873-4158